

### 1. 河口慧海の略歴とチベット旅行 part. 1

日本人としてはじめて西部・中央チベットの地を踏んだ僧、河口慧海(1866～1945)は、1900年にガンガー河の源泉とカイラス山を巡礼した。慧海がこの水源に到達したのはスウェーデンの著名な探検家スヴェン・ヘディンより7年も早く、画期的な意義をもつものであった。以下がその際の記録(『チベット旅行記』西域探検紀行全集7、白水社)である。

山の上にながったところに、きれいな澄みきった霊泉がある。それがチュミク・ガンガ(恒河の源泉)である。そこで水を飲んで、そこから北方の山に上がると、大きな大理石がある。その大理石の山のようになっている岩下に、また大きな霊泉がある。その名をチュミク・トン・ガア・ランチェン(見飲自然生泉)という。その名のとおり、実に見て喜び、自然にうれしい思いが生じる泉である。大理石の中から玉のような霊泉が湧き出ているので、実に喜びの心に耐えない。それらはみなインドのガンジス川のいちばん源の水である。この水は真の霊水であるといつて、チベット人とインド人の中に伝えられている。

#### [生い立ちと出発]

河口慧海は、慶応2年(1866)1月、和泉国(現在の大阪府)堺に生まれた。父は善吉、母は常。家業は樽桶製造業で、慧海は6人兄弟の長男、幼名は定治郎といった。幼児から家業を助けるかわら勉強の好きであった彼は、あるとき『釈迦一代記』という本を手に入れた。この1冊が彼の人生の運命を決定することになったという。信貴山の毘沙門天に満3か年精進の願かけをしたのは、15歳のときだったというから、いかに慧海が早くから堅固な意志を持った精進の人であったかがわかる。禁酒・禁肉食・不姪の3つの精進をその後10年間続けた後、しばらく中止し、再び一生続けたという。

19歳の秋、徴兵令改正に不当を感じた彼は、天皇に直訴を敢行しようとして上京した。しかしその企てが察知され、ニセ電報で呼び返されたため果たせなかった。この事件なども慧海の烈しい性格をあらわした一例であろう。上奏の計画は終わったが、堺の家には帰らず、長柄の正徳寺の佐伯蓬山師に師事し参禅した。

翌20歳の2月、正徳寺を抜け出し、摂津箕面の勝尾寺の山中に行き、松葉を噛みながら約1週間松の木の下で坐禅した。この苦行で定治郎の悟ったことは、「十分に学問をした後に考えるようにしなければならない」ということだった。そこで蓬山師のもとへ帰って、座禅よりも本を読ませてほしいと願い出たが、許されなかったので、久しぶりで堺のわが家に戻った。しかし正徳寺の生活で、読経その他仏寺の諸儀式を覚えた。

堺の晩晴塾で土屋鳳州から漢学を学んでいたが、そのかわら宣教師コルビー女史について英語を学び、聖書も勉強したというから、彼の貪欲な知識欲が察せられよう。しかし彼はキリスト教にはおもむかなかった。仏教を信じるのがそれ以上に強かったからである。

その後、京都の同志社にはいったが、学費が続かず、数か月で退学して堺に帰り、小学校の雇い教員になった。しかしこれも1年ほどでやめた。当時から彼は不正を憎み義侠心に富んでいて、教育界や仏教界の腐敗に対しては仮借ない態度をとった。

23歳の2月、定治郎は上京して、本所の黄檗宗五百羅漢寺(後に目黒に移転)に寄宿し、かねてから志望のあった哲学館(今の東洋大学の前身)に苦学しながら通った。当時、井上円了が創立した哲学館では、ドイツ文献学を身につけた南条文雄が教鞭をとっており、サンスクリット語やチベット語で記された仏典の研究を奨励していた。この講義が彼のチベット行に少なからず影響を与えたものと思われる。

明治23年(1890)、彼は25歳で、五百羅漢寺の住職から得度を受け、慧海仁広と名づけられた。智慧と仁心が海のように広いという意味であった。ここに初めて河口慧海が誕生したのである。出家してまもなく、住職がとつぜん隠退したので、慧海はそのあとを継いで同寺

の住職となった。

翌年3月、哲学館の業を終えた。もともと彼の上京は勉学が目的であったので、住職としての雑務のわずらわしさに堪えられなかった。そこで五百羅漢寺の住職を辞し、僧籍を返還した。そして宇治の黄檗宗管長のもとで一切経を読み始め、その過程で原典を研究する必要性をさらに痛感するようになった。慧海の心には仏典の原典を求めてチベットに旅立つ決意が次第に固まっていった。

6年後の明治30年(1897)6月26日、32歳の慧海は神戸を出帆し、門司、上海、シンガポールで乗り換え、7月25日にインドのカルカッタに上陸した。しかしチベットへ入るまでに3年かかった。当時のチベットはイギリスや中国といった帝国主義勢力の伸張を恐れて鎖国状態にあったからである。まず慧海はインドのダージリンに行き、チベット語の勉強から始めねばならなかった。

#### [インドからネパール経由、トルポへ]

ダージリンで慧海が最初に訪れたのはサラット・チャンドラ・ダースであった。彼は、イギリスが鎖国のチベットへ地理調査のため潜入させたインド人のチベット学者で(このような任務のインド人のことをパンディットと呼ぶ)、慧海の外護者としてチベット語学習を助けた。チベット語の学習を終えた慧海は、いよいよチベットへ入る準備のためカルカッタに戻り、そこから釈迦成道の地ブッダガヤを経て、中国人の一巡礼僧に変装して(黄檗宗の本拠地である福州出身と自称)、ネパールに密入国し、首府カトマンズへ向かった。河口慧海はカトマンズを訪れた最初の日本人旅行者であった。

カトマンズでは、ボードナートとスワヤンブナートの2つの仏塔を礼拝した。ボードナートは釈迦牟尼以前の過去仏の一人である迦葉仏の舍利塔、スワヤンブナートは同じく尸棄(シキ)仏の舍利塔。ボードナートは、カトマンズ盆地のほぼ中央にそびえる大仏塔で、この塔はチベット語でチャルンカーショルと呼ばれた。古来チベット仏教との関係がことのほか深く、ヒマラヤを越えてチベット、モンゴリア、中国などからやってくる参詣者で賑わった。慧海は、この大塔村の村長であるブッタバッザラ(父親が中国人のチベット仏教僧)の家に寄寓し、ブッタバッザラの世話を受けて一か月余り暮らし、チベットからきた巡礼乞食たちから、ヒマラヤの間道に関する情報を集めた。

慧海は、チベットへの潜入経路に目星が付くと、彼のことを同郷人だと思っていたブッタバッザラに、マパム・エムツォ(マーナサローワル湖)とカンリポチェ(カイラス山)に巡礼に行きたいと話した。ブッタバッザラは危険だと反対したが、慧海の決意が固いのを知って同行者を探してくれた。ブッタバッザラから購入した白馬にまたがり、4人の従者を従えて、カトマンズ盆地を後にしたのは1899年2月下旬のことであった。

一行は10日を経てポカラに到着、この町はヒマラヤ交易の重要な中継地であるが、ここに6日ほど滞在したあと、カリ・ガンガ(カリ・ガンダキ)川を北上してツグゼー(トゥクチャ)に到着。そこから聖地ムクティナートへ寄り道して参詣した後、再びカリ・ガンガをさかのぼって、ムスタンボット地方のツァーランへ行き、そこの寺で仏教の博士について約10か月修行した。その間にチベットへ超える間道を詳しく研究した。慧海は『チベット旅行記』にツァーランの様子を詳しく書いている。

ツァーランからいったんカリ・ガンガ川を下ってマルパーまで引き返し、そこでチベット入りの最後の準備をした。慧海の紀行をたどれば、彼はマルパーから再びカリ・ガンガをさかのぼり、支流ケハ・ルンバ川に従う道をとって、ドゥラギリ山脈北側のツァルカに着いた。このツァルカから西に広がる広い土地がボン教で有名なトルポ地方である。

1900年3月10日、慧海はツァルカで、それまでついてきた案内人を返し、たった一人でチベットへ向かった。なお、慧海がツァルカからどの地点でチベットへ超えたか、『チベット旅行記』の記述では明らかでない。しかし近年、登山家で作家の根深誠がそのルートを明らかにしている(『遙かなるチベット—河口慧海の足跡を追って』(中公文庫))。

## ※ボン教とは

…ボン(ボン)教は、仏教と並ぶチベットの大宗教である。それは、チベットに古くから伝わる精神的伝統を受け継ぐもので、仏教伝来以前から、この地に行われていたものと考えられる。

ボン教はしばしば、外来宗教である仏教に対するチベット土着の信仰の代名詞として用いられ、仏教が前伝期、すなわち古代チベット王国時代に受けた弾圧(破仏)の責任者として、名指しされる場合が多い。しかし、こうした古い時代のボン教の歴史と実態については、不明な点が多い。「ボン」の語は、古い文献では、墓前において儀式を司り、神話を朗唱し、様々な神霊を供養する司祭の一種、として登場する。

ボン教の開祖はシェンラブ・ミボという人物とされ、ユンドゥグプツェー山のあるウルモルンリンの地に天から降り、その国の王子として出生した、と伝えられる。このユンドゥグプツェー山は、チベットの西南部、古代のシャンシュン地方にそびえるカイラス(カンティセ)に当たる。この地方にボン教が栄えていたことは確かであるが、ウルモルンリン自体は、さらに西方のタジク(ペルシア)の一部と伝承されている。

シェンラブ・ミボは、元来「シェン(古代の犠牲を捧げる司祭の一種)の第一人者」を意味し、釈迦牟尼のような実在の人物であったかどうかは疑わしい。実際、その伝記は釈迦牟尼の伝記の焼き直しである。

仏教がチベットに流布するにつれて、ボン教は、仏教の理論と実践を積極的に取り入れ、数世紀の間に、仏教と見まがうばかりの大系を整えた。そのため、ボン教の教理には仏教の教理と酷似したものが多い。特に関係が深いのは、ニンマ派である。ボン教も、ニンマ派も同じく「埋蔵經典」を持ち、「九乗」の体系を有し、「大究竟(ヴグチェン)」の教義を奉ずる。

こうした類似性のために、ボン教徒は、かえって仏教との違いを際立たせる必要に迫られたのか、仏教の法輪に対して左回りの卍をシンボルに、仏教徒が右邊するのに対して左邊の礼法をとる。また、仏教の「オン・マニ・ペメ・フーン」がサンスクリット語を写したものであるのに対して、ボン教の「オン・マトリ・ムエ・サレ・ドウ」はシャンシュン語とされる。ボン教は、仏教風の僧院組織を作って今日まで生き延びている。ボン教の主要僧院は、中央チベットのツァン地方にあるメンリ寺やユンドゥンリン寺などがある。



根深誠氏の踏査ルート